

文教常任委員会資料

令和7年10月16日
(2025年)
教育委員会事務局学校教育課

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果について

標記の件について、次のとおり報告します。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果について

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析するとともに、教育施策の成果と課題を検証し、改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や、学習状況の改善に役立てる。
- (3) 教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の内容

- (1) 調査実施日 令和7年4月17日（木）
- (2) 調査対象 国・公・私立学校の小学校第6学年、中学校第3学年
（原則として該当学年の全児童生徒）
- (3) 調査内容
 - ア 教科に関する調査
 - ・小学校 国語、算数、理科で実施
 - ・中学校 国語、数学、理科【選択問題含む】で実施
 - イ 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問調査
- (4) 受検者数
 - ア 小学校 実施学校 18,269校 集計対象児童数 936,576人
 - イ 中学校 実施学校 9,272校 集計対象生徒数 871,097人

3 調査の活用

- (1) 各学校においては、調査結果を踏まえ、個々の児童生徒の全般的な学習状況の向上等に努めるとともに、教育指導等の向上に向けて計画的に取り組む。
- (2) 本市教育委員会においては、調査結果を踏まえ、学校における取組等に対して必要な支援等を行うなど、市内の教育及び教育施策の向上に向けた取組を推進する。

4 結果の概要

平均正答率を全国と比較すると、小学校の算数は同程度でしたが、国語は1.8ポイント下回る結果となりました。全国平均との差が大きかった小学校においては、基礎・基本の定着を図るため、現行の指導に加え、習熟の時間を確保するなど具体的な取組が求められます。

中学校は国語・数学ともに全国平均と同程度でした。どの学校でも基礎・基本の定着を図ることができています。今後、活用問題の習熟を図ることが期待されます。

質問紙調査の「授業について」では、他者と協力しながら共に学ぶ「協働的な学び」への肯定度が高い結果となりました。本市が推進している「学び合い学習」が定着し、互いの成長を支え合う集団が醸成されていると考えられます。

家庭学習時間の確保においては、昨年度と同様に課題が見られる結果となりました。家庭での学習の仕方を理解させ、定着させる具体的な指導が強く求められます。

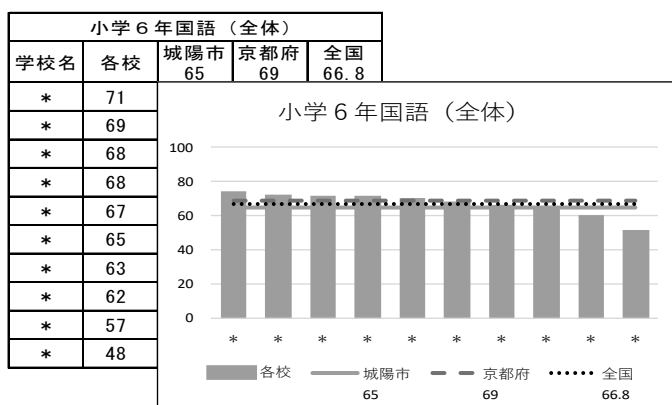
生活習慣の状況は良好な状態を維持しています。朝食を毎日食べる児童生徒の割合が一番低い学校においては、昨年度に比べ小学校で3ポイント、中学校で5ポイント向上しました。

5 小学6年国語の結果

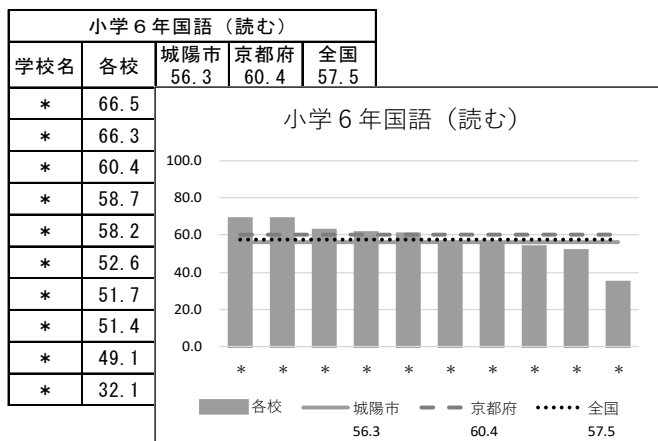
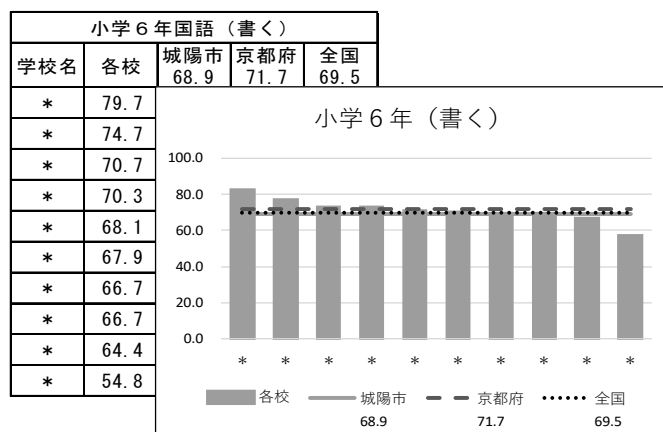
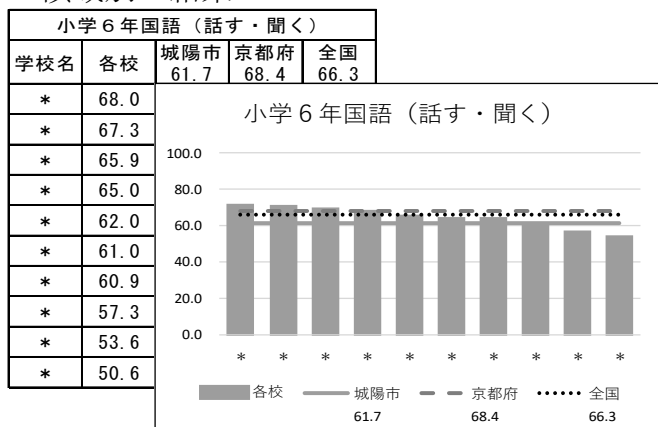
- ・城陽市における「全体」の平均は、全国平均を1.8ポイント下回りました。正答率が低い学校は「読む」領域が弱い傾向にあります。国語の授業時間以外にも書物に触れる機会を確保するなど、長文に慣れる手立てを講じる必要があります。
- ・他者に分かりやすく伝える力の土台となる「話す・聞く」「書く」の2つの領域には相関性が見られます。全国比で正答率が低い学校については、“伝える力”を伸ばすための「協働的な学び」を充実させる工夫が求められます。

(1) 調査の状況

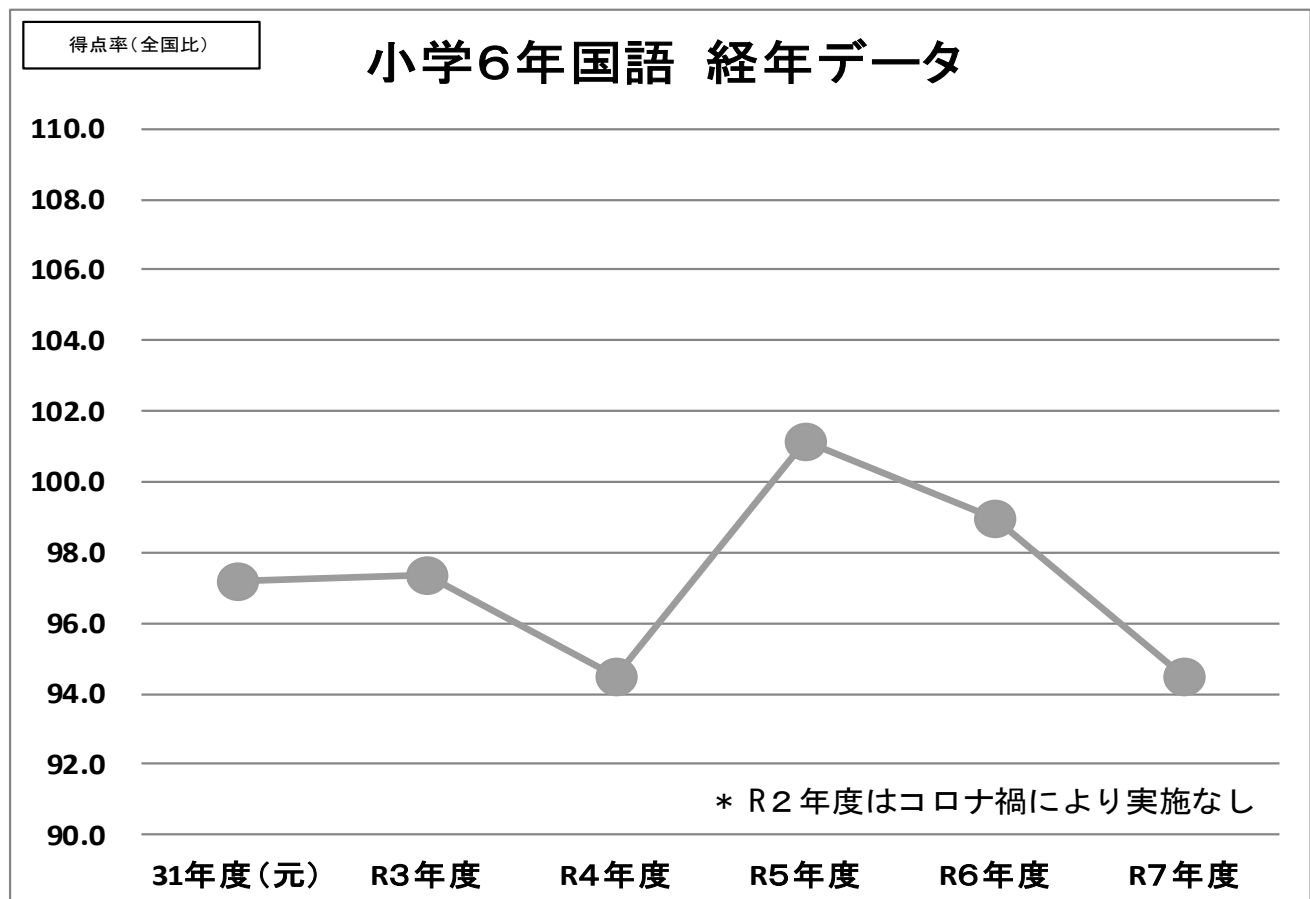
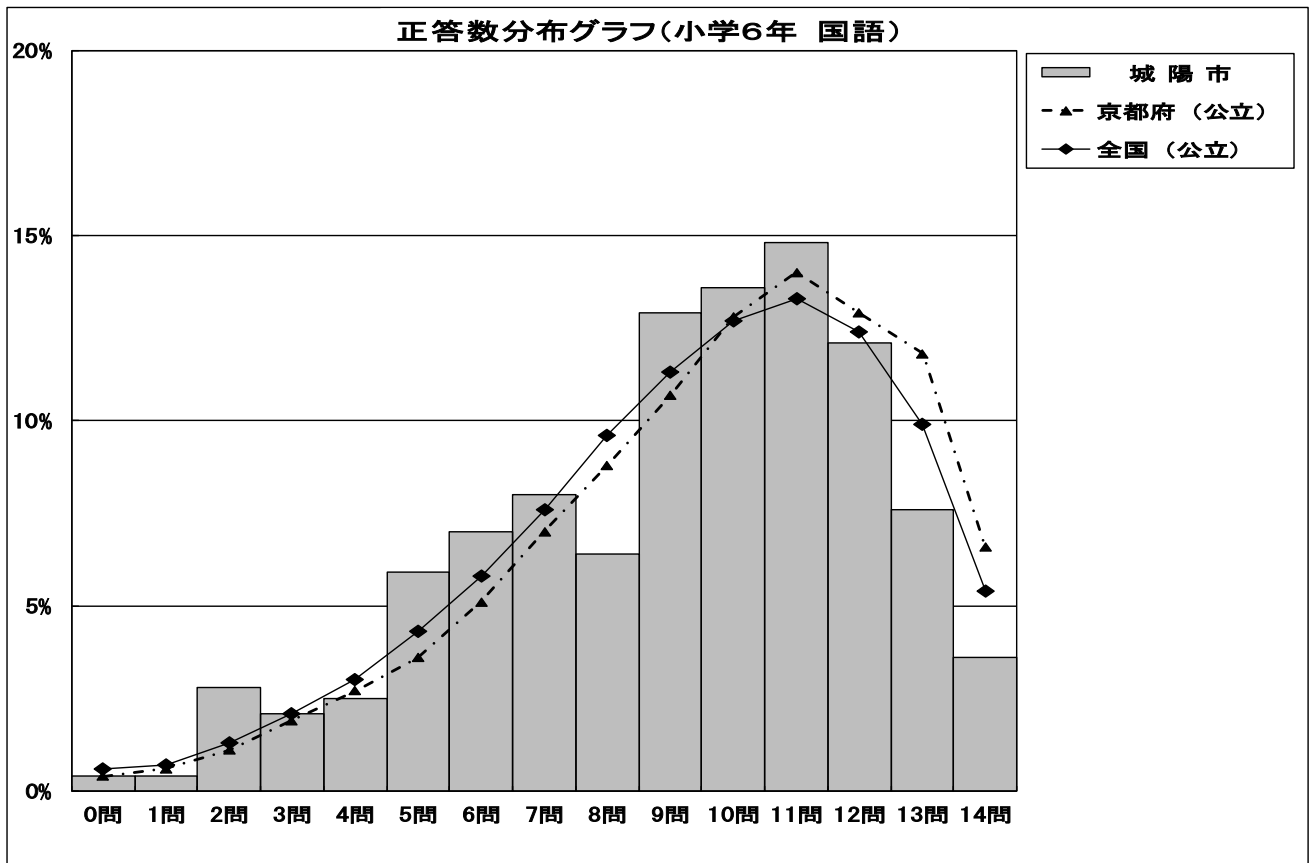
<全体の結果>



<領域別の結果>



(2) 正答数分布グラフ・経年データ

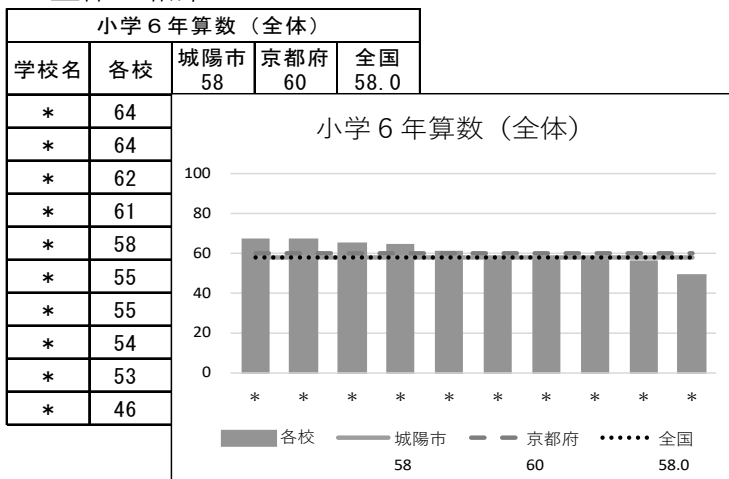


6 小学6年算数の結果

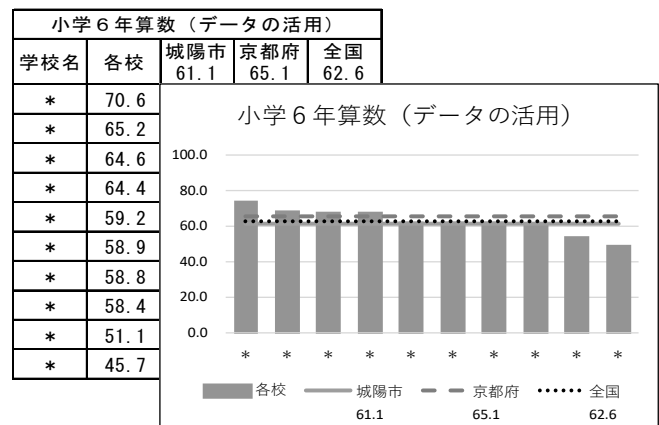
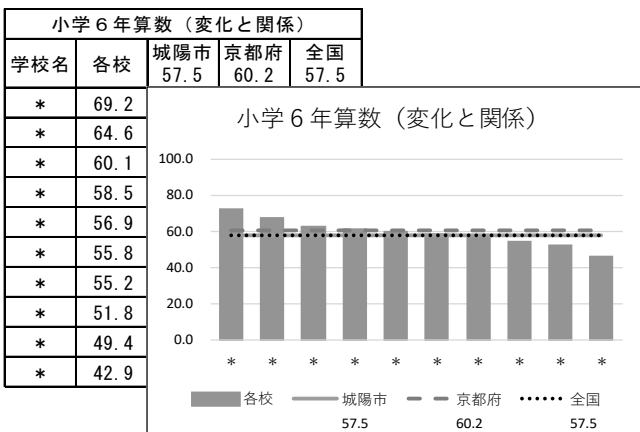
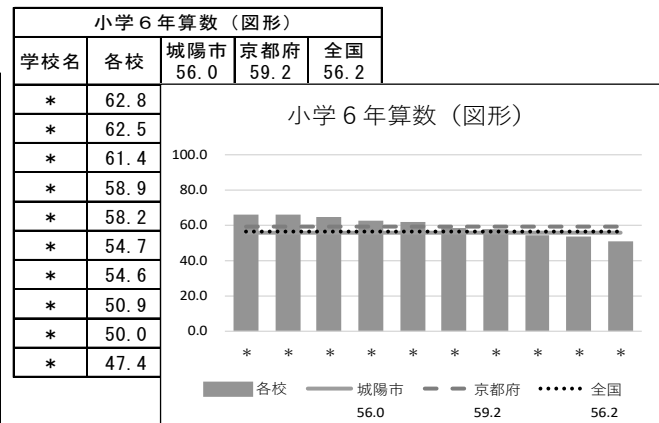
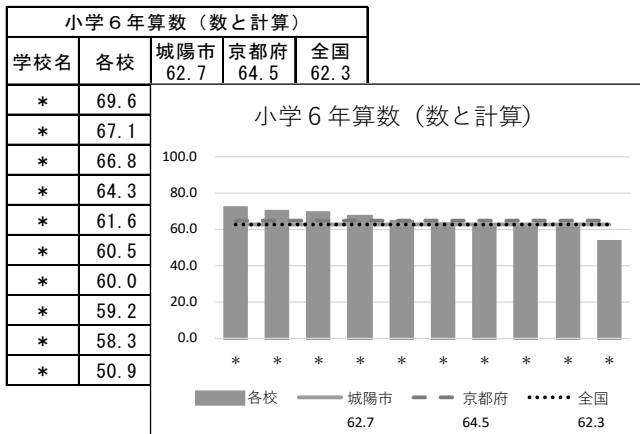
- ・城陽市における「全体」の平均は、全国平均と同程度の結果となりました。基本技能の「数と計算」の領域では全国平均を上回りました。
- ・「変化と関係」と「データの活用」の領域で学校間の差が大きくなりました。「変化と関係」と「データの活用」の領域に課題がある学校には、問題に表された場面の理解を、丁寧かつ具体的に確認する時間を確保する授業展開が求められます。

(1) 調査の状況

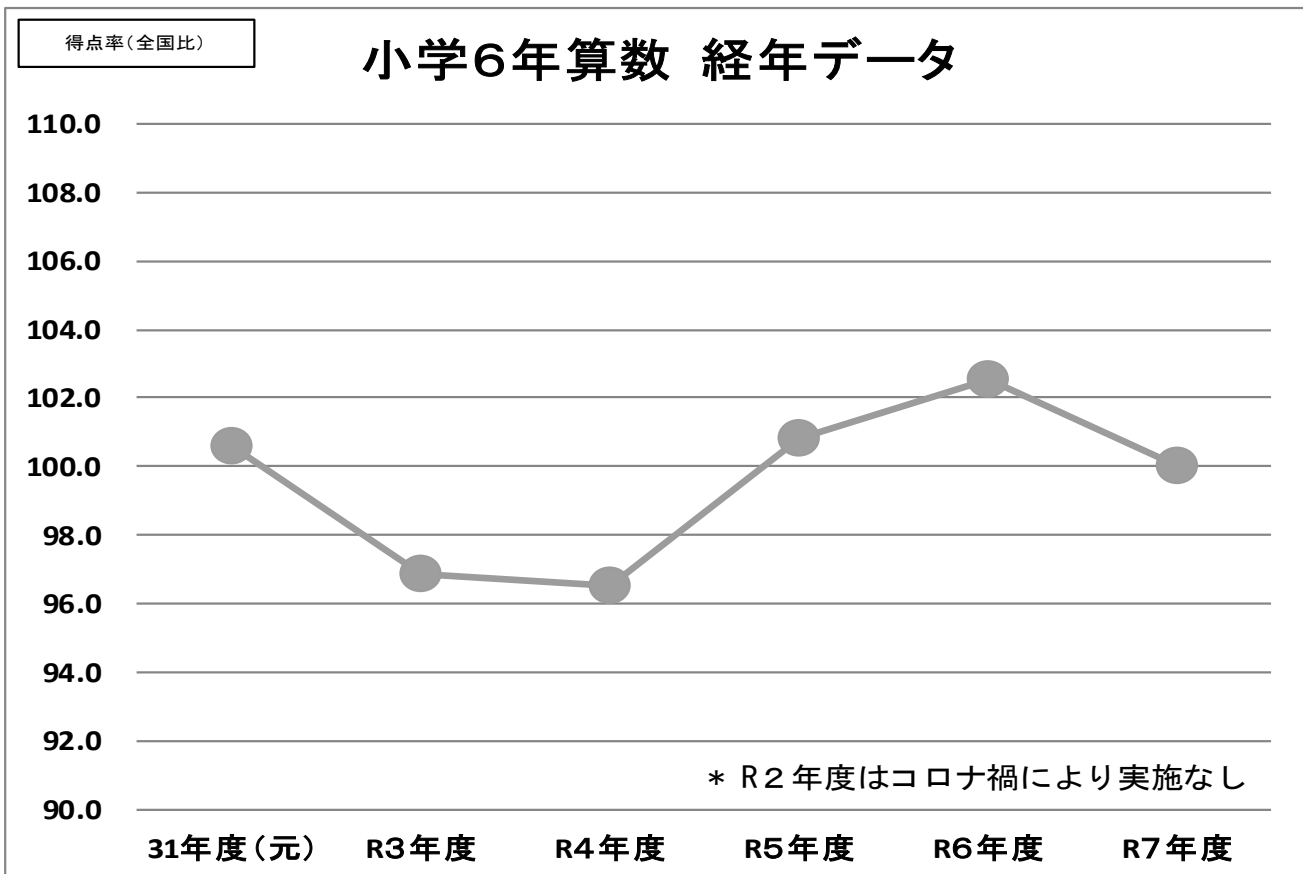
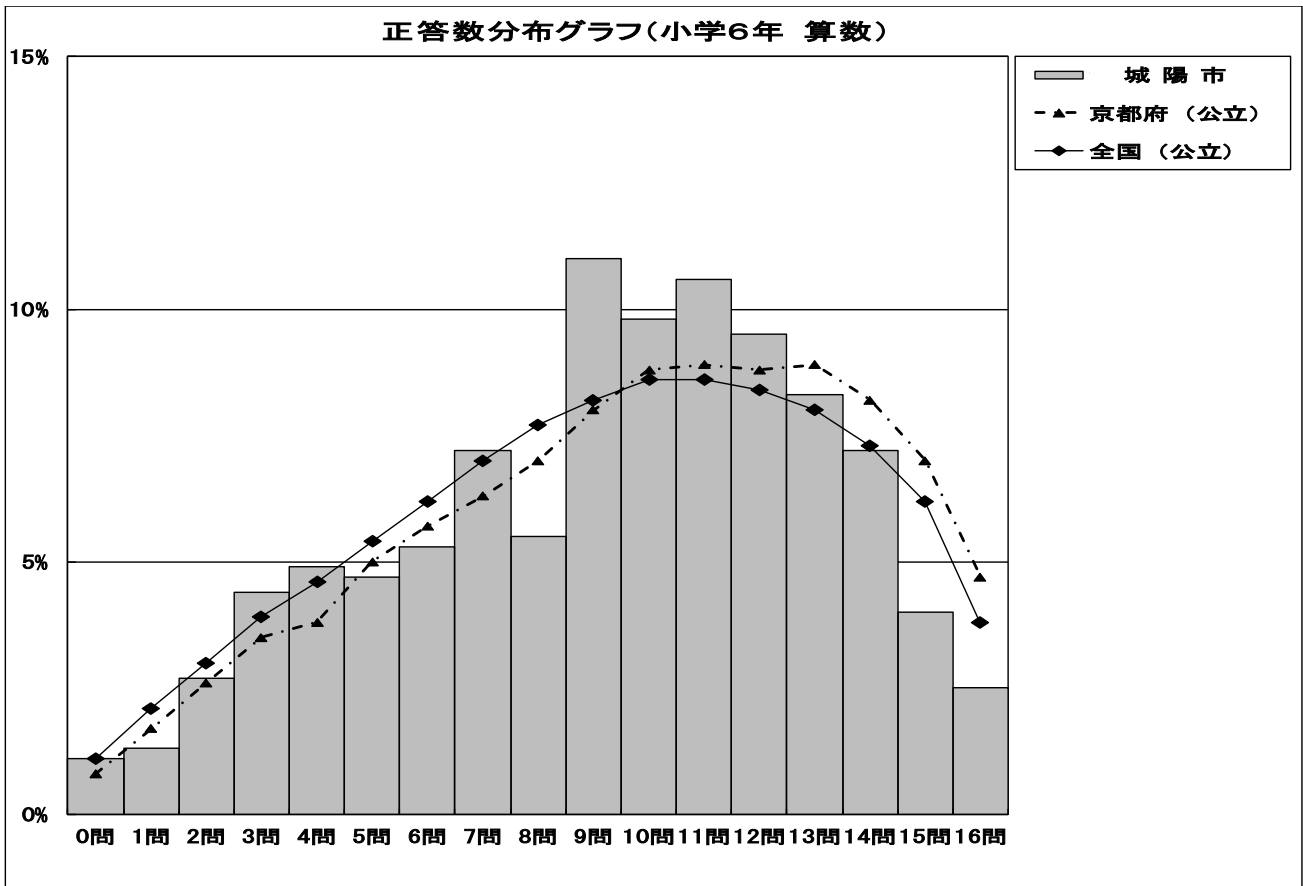
<全体の結果>



<領域別の結果>



(2) 正答数分布グラフ・経年データ

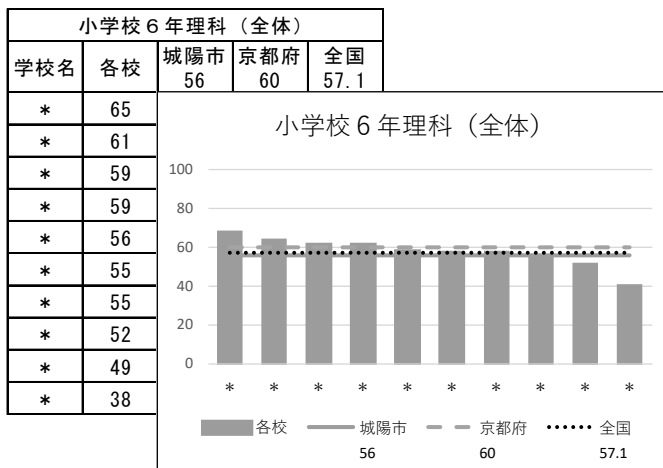


7 小学6年理科の結果

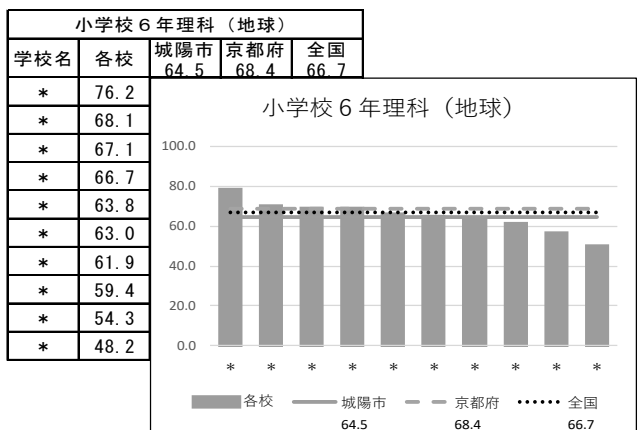
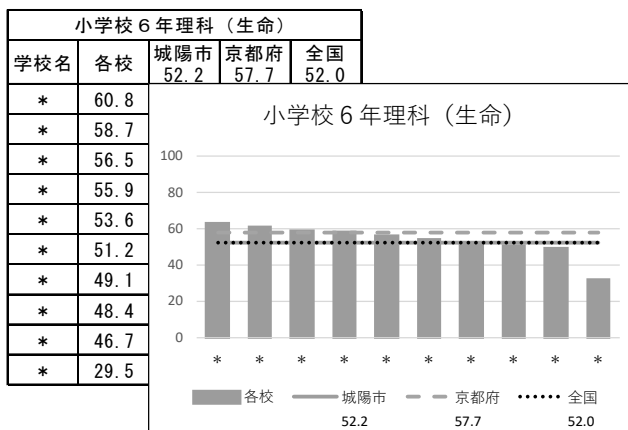
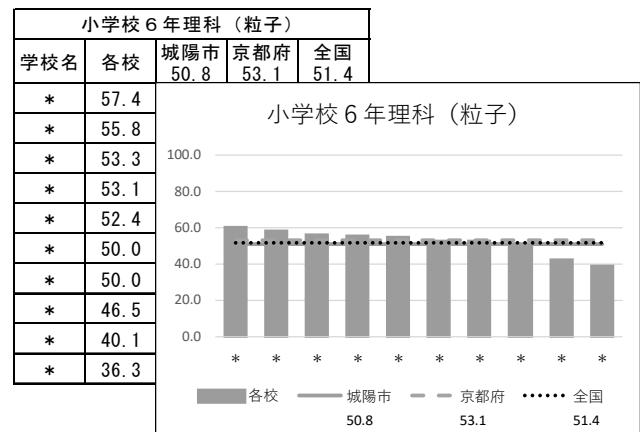
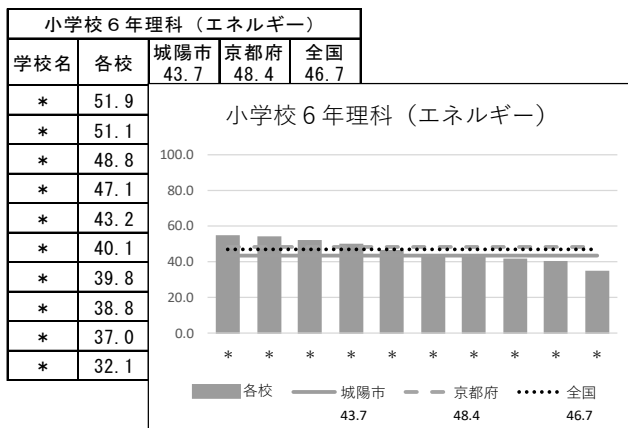
- ・城陽市における「全体」の平均は、全国平均を1.1ポイント下回りました。「生命」の領域では全国平均を上回りました。
- ・「エネルギー」の領域は、全国でも本市においても正答率が低くなりました。実物が見えない物事を学習するため難しい領域ですが、生活の中から疑問や課題を見出す過程を大切にし、“目的意識”を持ちながら実験を行い、理解を深めることができる授業のあり方が求められます。

(1) 調査の状況

<全体の結果>



<領域別の結果>

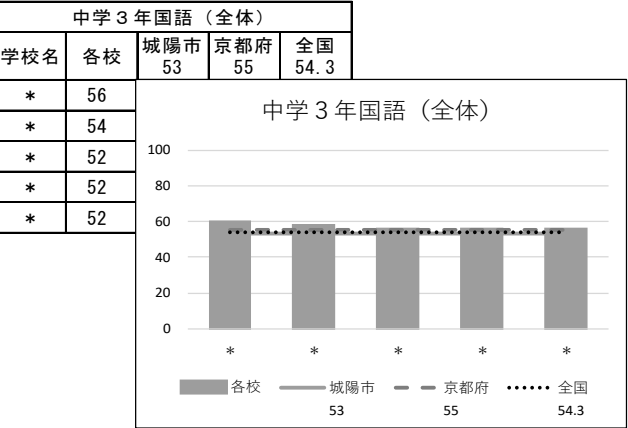


8 中学3年国語の結果

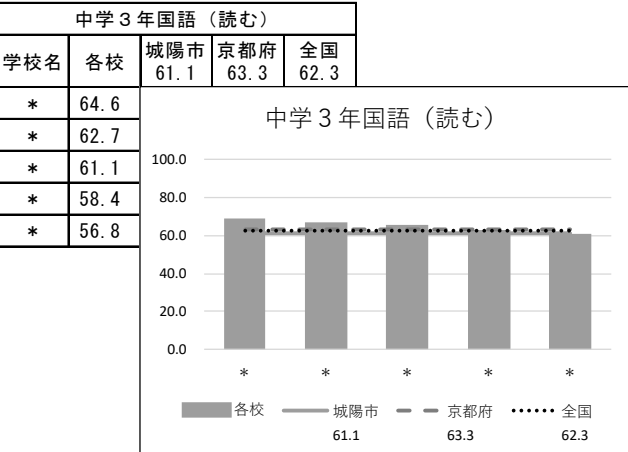
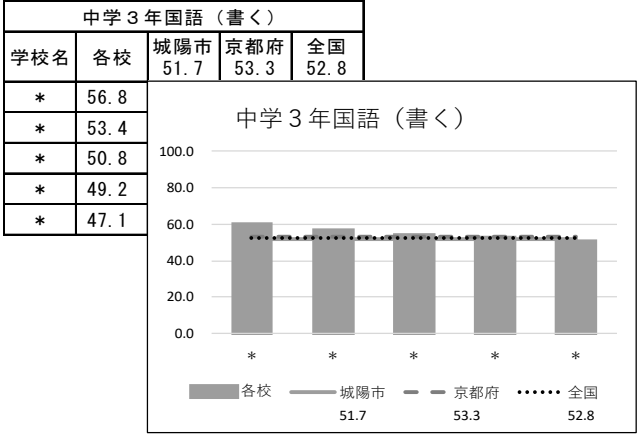
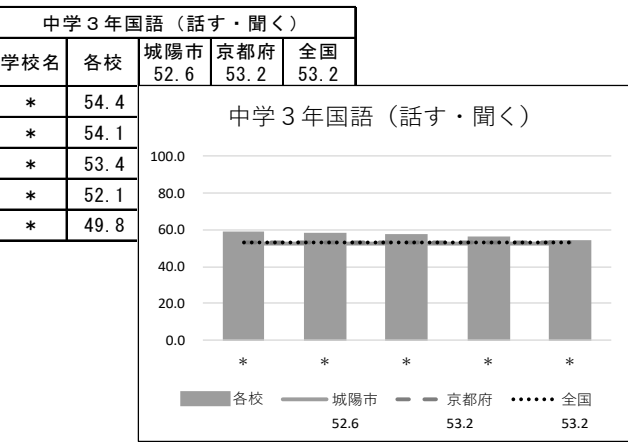
- ・城陽市における「全体」の平均は、全国平均を1.3ポイント下回りました。
- ・正答数分布グラフでは中央値付近に人数が集中しています。基礎・基本が定着しているため、低位層は少人数です。今後は、希望進路の実現に向け、低位層の生徒に対する学習支援を充実させること、活用問題の習熟によって中位層の生徒を上位層に引き上げることが求められます。

(1) 調査の状況

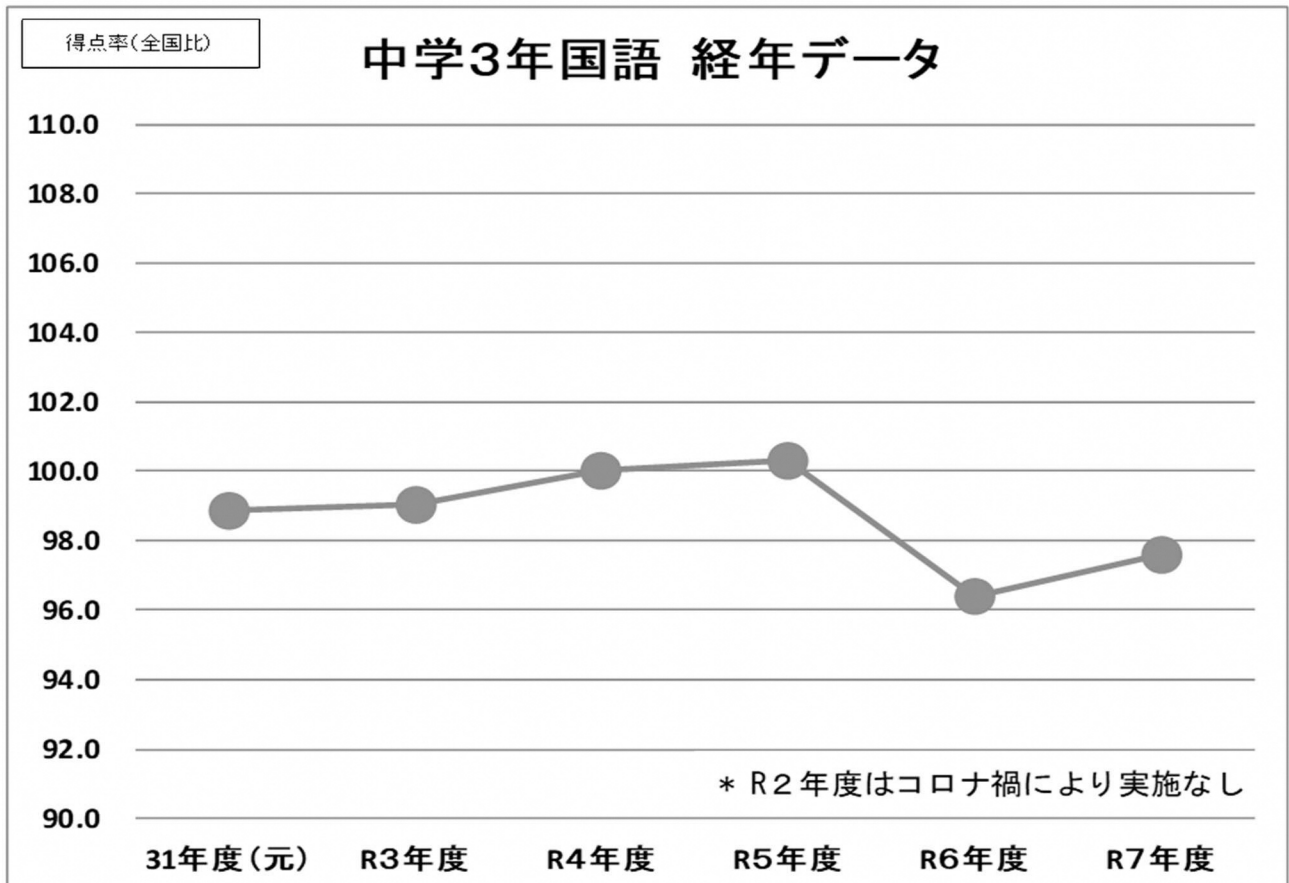
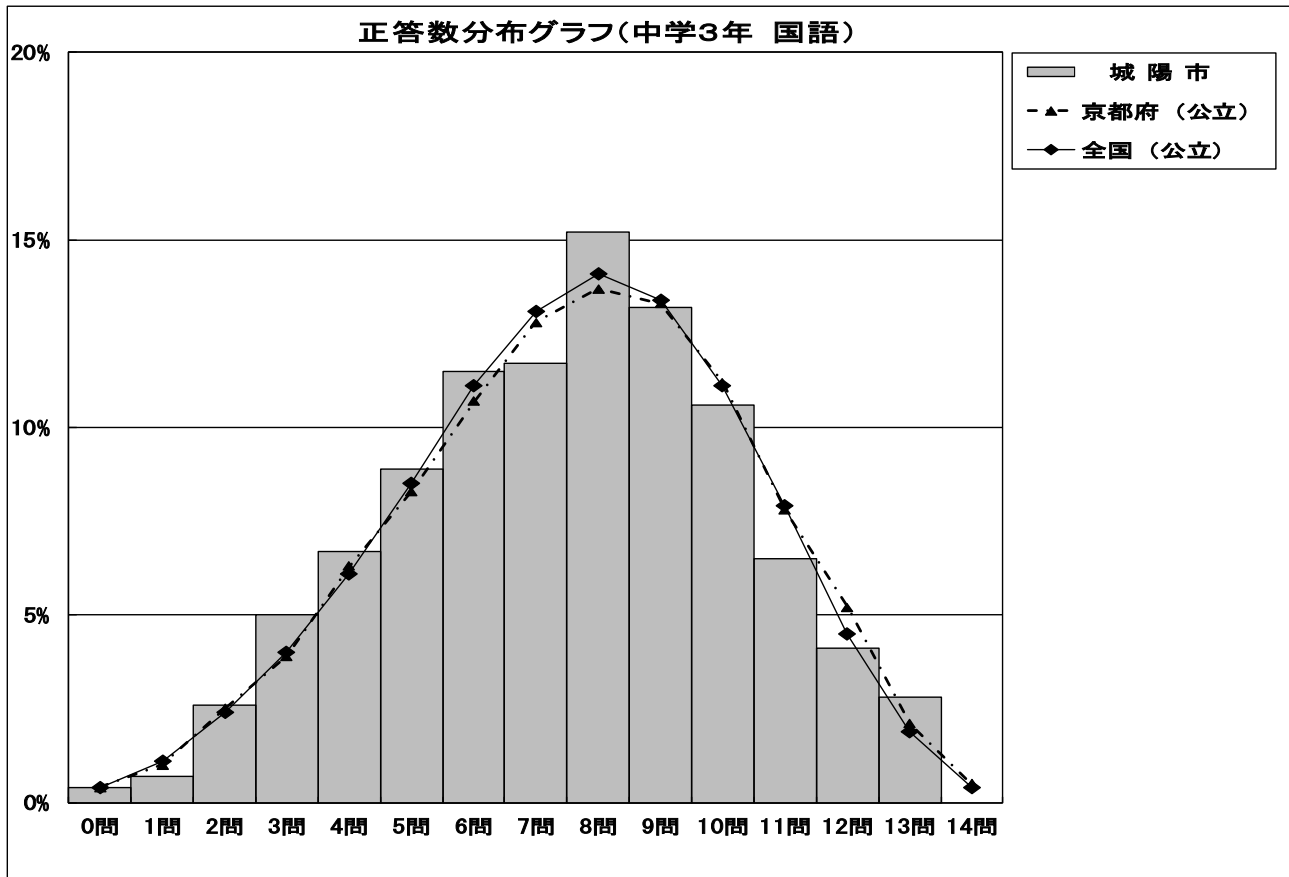
＜全体の結果＞



＜領域別の結果＞



(2) 正答数分布グラフ・経年データ

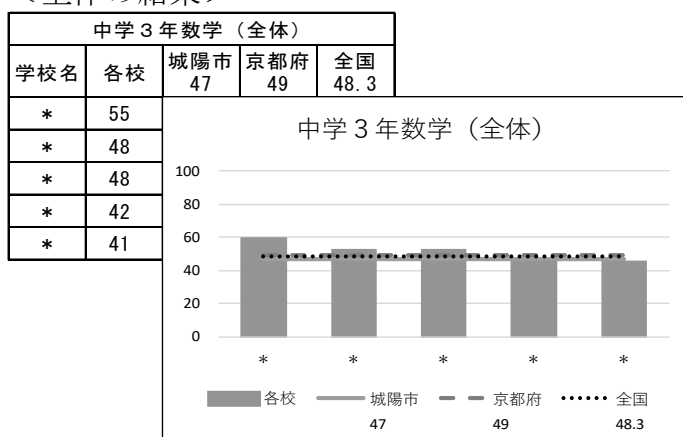


9 中学3年数学の結果

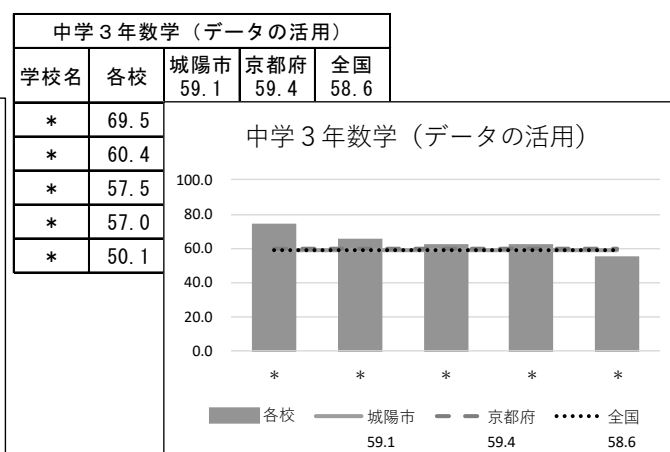
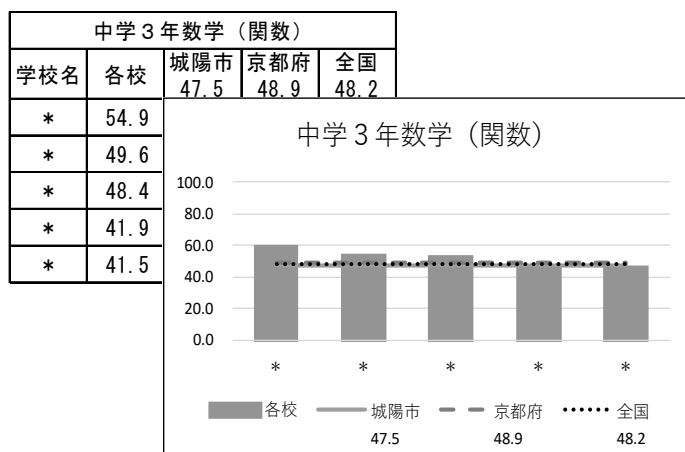
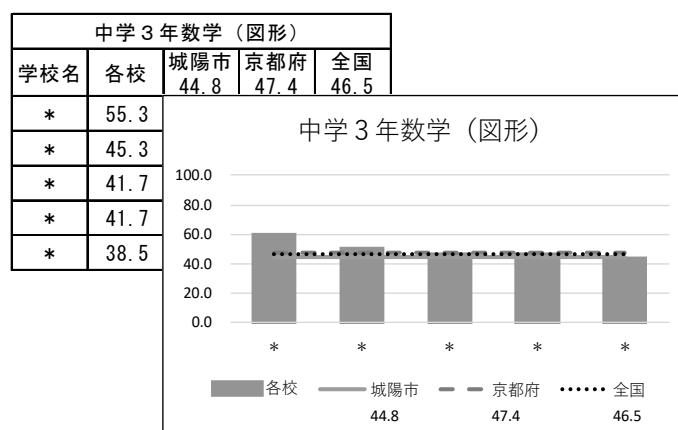
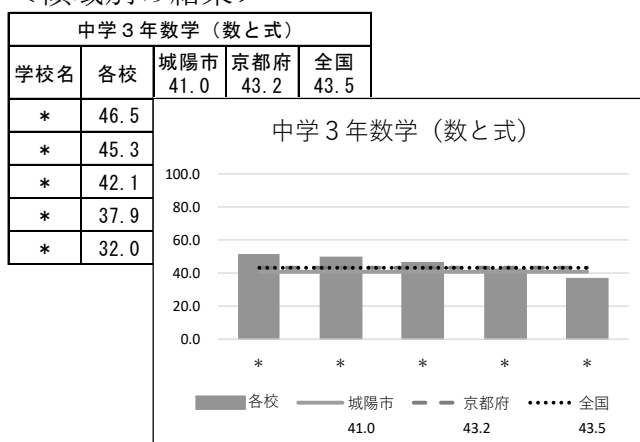
- ・城陽市における「全体」の平均は、全国平均を1.3ポイント下回りました。
- ・平均値は、どの領域も全国とほぼ同程度ですが、正答数分布グラフからは、学力低位層から上位層までの生徒数がほぼ均等であることが分かります。一定数いる低位層の生徒には今後も基礎・基本の定着を図る丁寧な取組を充実させ、中位層以上の生徒には一人一人に応じた学習支援を充実させることが求められます。

(1) 調査の状況

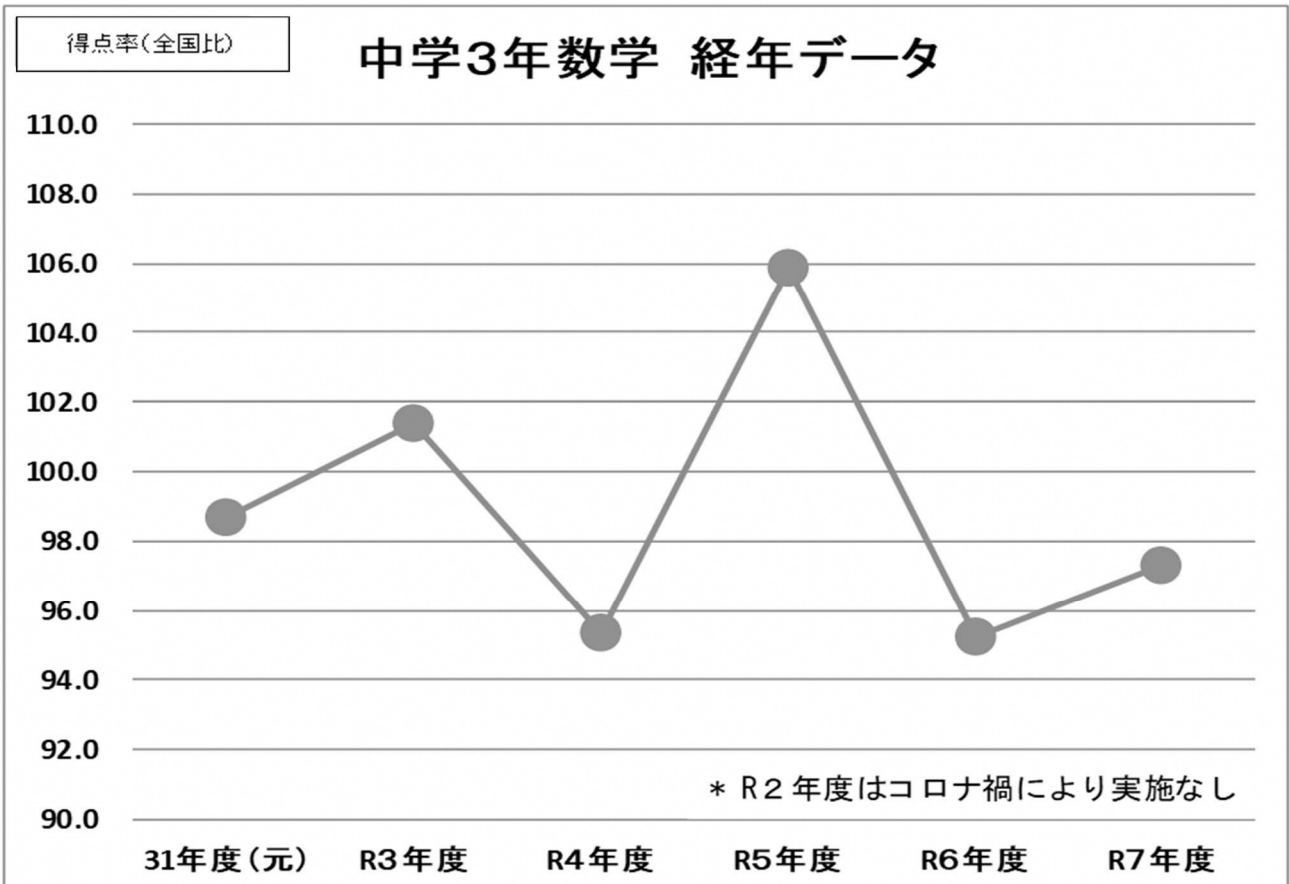
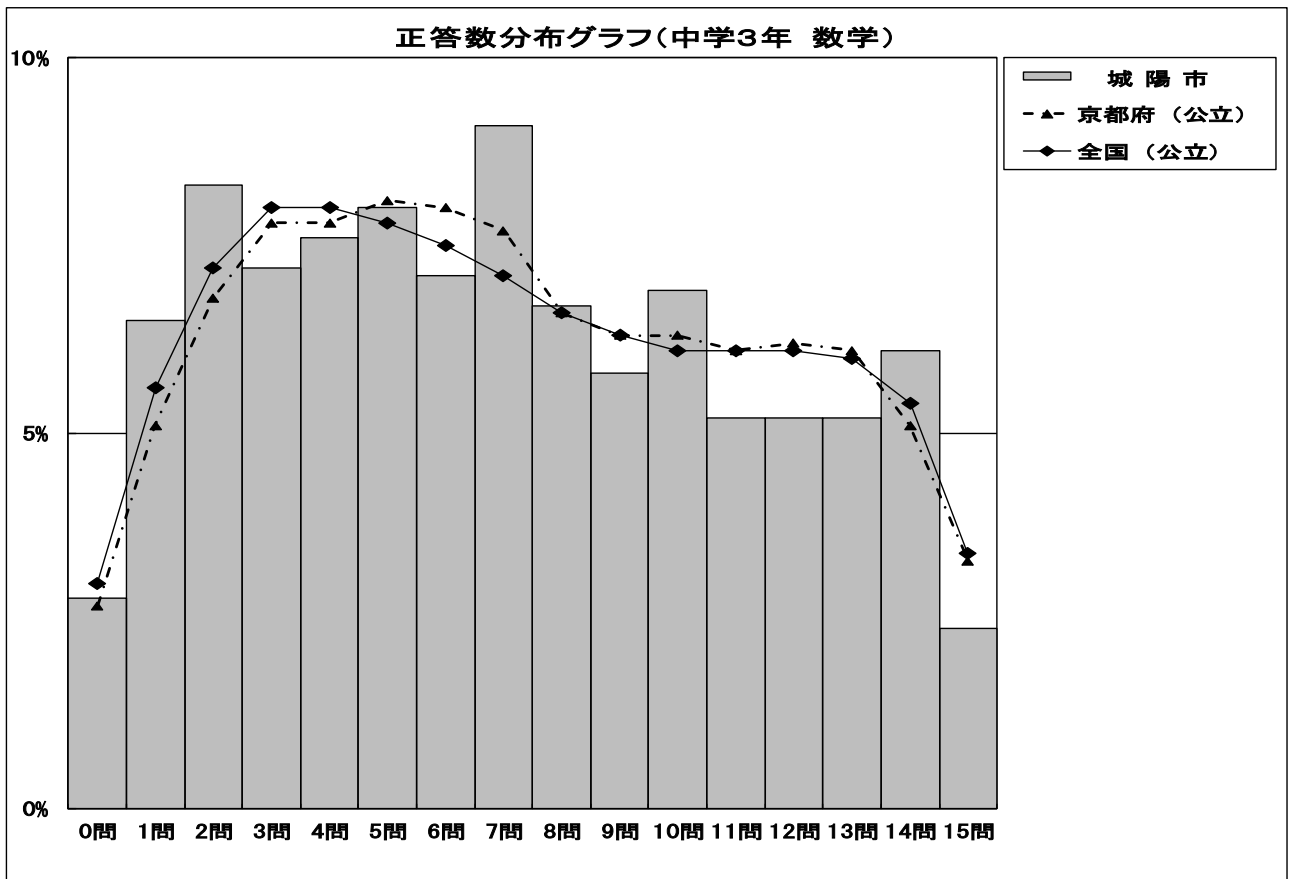
<全体の結果>



<領域別の結果>



(2) 正答数分布グラフ・経年データ



10 中学3年理科の結果

【中学校理科について】

理科テストは3年に一度を目安に実施します。令和7年度「中学校理科」には非公開問題が含まれています。結果はこれまでの正答数・率に代えて、*IRTスコア・バンドで表示・返却されました。

*IRTスコア…テストの一種。児童生徒の正答・誤答が問題の特性（難易度・測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する理論。

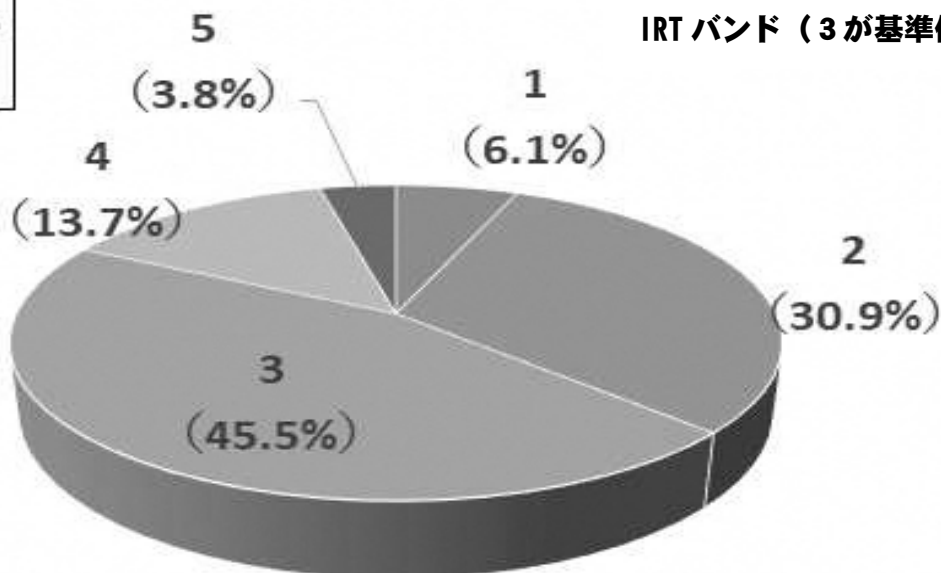
*IRTバンド…推定された学力スコアを5分割して表示するもの。「3」を基準のバンドとし、「5」が最も高いバンドとなる。
（出典：文部科学省ホームページ）

【中学3年理科の結果】

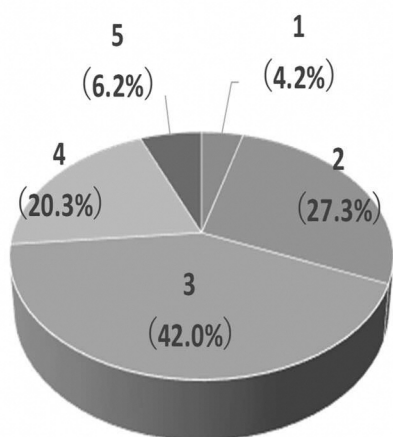
全国に比べ、基準を下回る「1」「2」のバンドの割合が高い結果となりました。理科に対する関心が低い生徒が多いことが考えられます。理解したことを、社会の動きや自然現象の中で実感する機会を確保するなど、生徒が理科を学ぶ意義を理解するための手立てを講じる必要があります。

城陽市

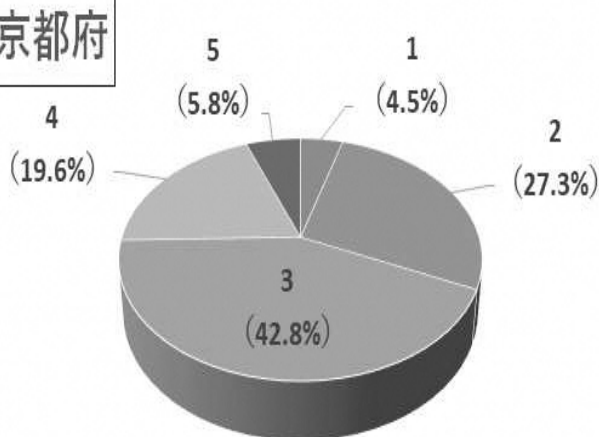
IRT バンド（3が基準値）



全国



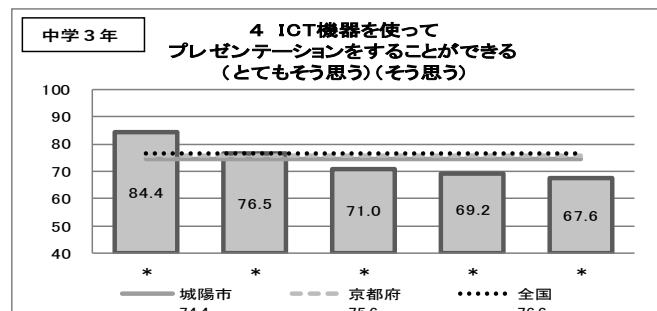
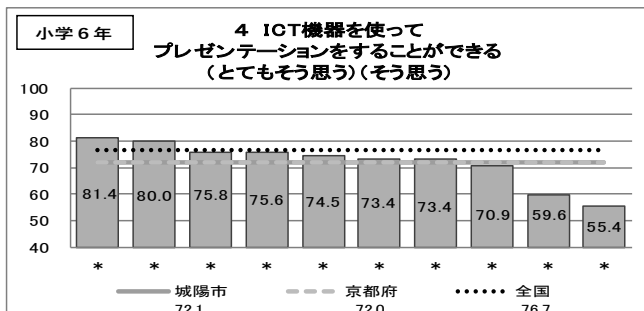
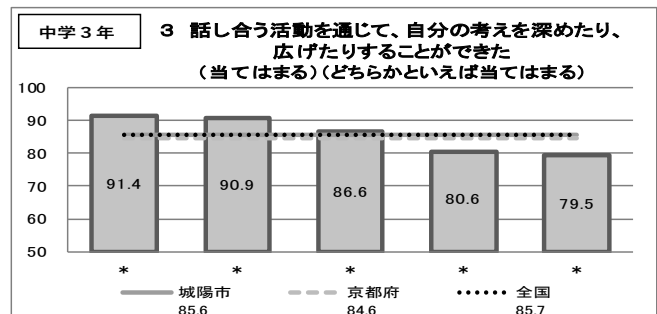
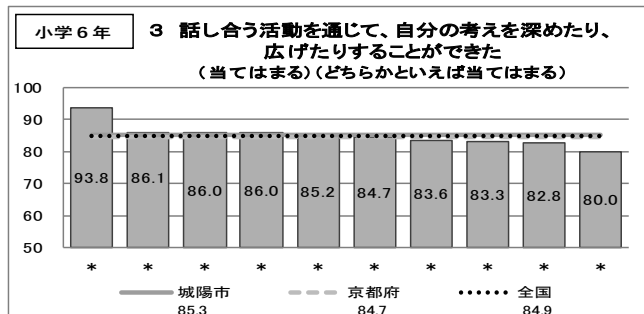
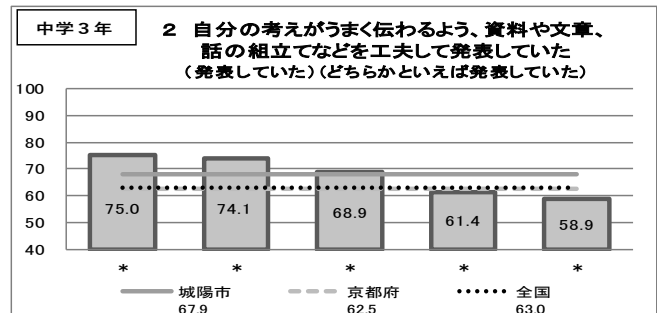
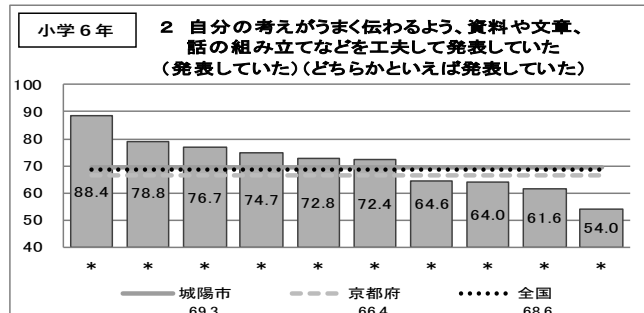
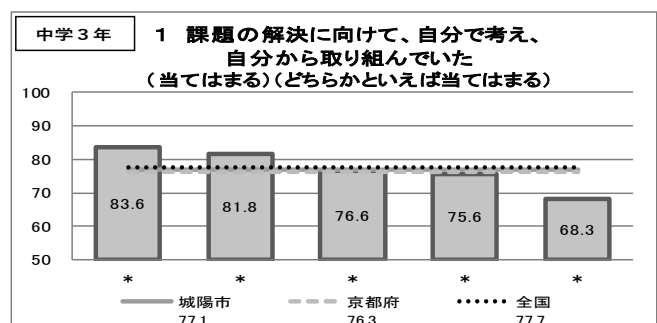
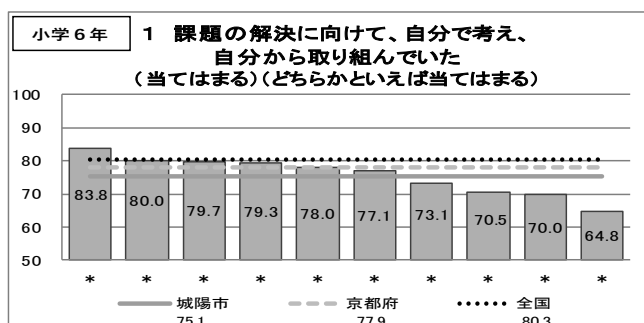
京都府



11 質問調査の結果

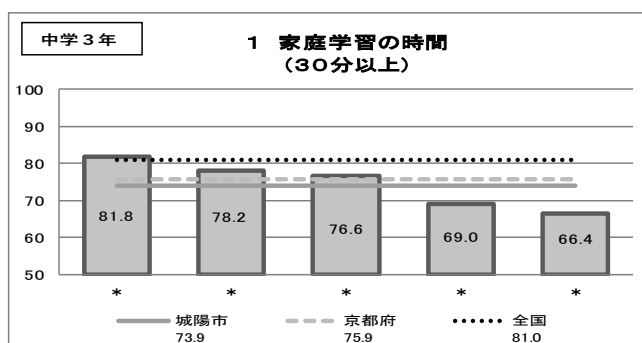
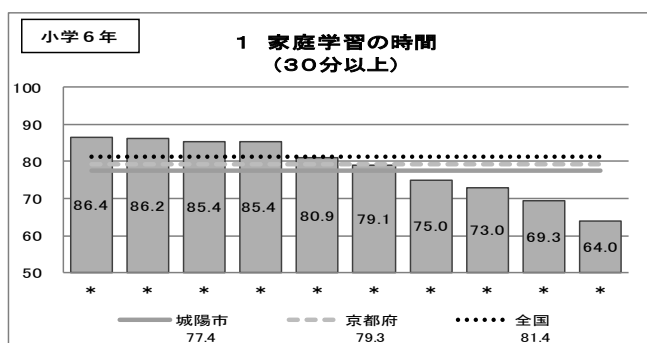
(1) 授業について

- ・ 1の「主体的な学習」に関する項目は全国平均を下回りました。児童生徒が自分に合った学習方法を理解し、課題の解決に向け、進んで学習を深める学習意欲を向上させる指導が求められます。
- ・ 2、3の「協働的な学び」に関する項目は全国平均を上回りました。児童生徒が学習する際に、“積極的に自らの考えを発信し、刺激し合い学び合う機会を確保する授業”を市内全校で推進したことが要因と考えられます。持続可能な社会のつくり手を育成するために、今後も「協働的な学び」を推進します。
- ・ 4の「ICT機器の利活用」に関する項目は全国平均を下回りました。タブレットを使った「探求的な学び」を推進しているものの、プレゼンテーションに対する自信は低いことが分かりました。学んだことを表現する機会の充実が求められます。



(2) 家庭学習について

- ・家庭学習の時間が「30分以上」と回答した割合は、小学6年、中学3年ともに全国平均より低い割合となっており、家庭学習の習慣づけが求められます。
- ・児童生徒が計画的に学習できるよう、学びに向かう力と学びを調整する力を育成することが求められます。また、自主的な学習を推進するために各校が作成している「家庭学習の手引き」等を再度見直し、児童生徒自身が有効活用し実践できるように手立てを講じる必要があります。



(3) 生活習慣等について

- ・朝食を毎日食べていると回答した割合は、小学6年は全国平均と同等、中学3年は全国平均を上回りました。小学校から継続して行っている「生活調べ」の取組が成果として表れたと考えられます。小学校においては食べていない児童の割合は、市内全体として昨年度より減少しております。
- ・毎日、同じくらいの時間に寝ていると肯定的に回答した割合は、昨年度と同様に平均値では全国と同程度となっておりますが、小学校においてはやや不規則となった状況が見られます。学力や、登校意欲の向上のために、十分な睡眠をとるよう、生活指導・啓発を一層強化する必要があります。

